

平凡社 

850円

0339-401023-7600

日本 西語 物語 残

第2部
忘れられた土地



平凡社

日本残酷物語

第2部

忘れられた土地

昭和35年1月30日 初版第1刷発行
昭和47年9月20日 第2版第1刷発行
昭和53年4月28日 第2版第7刷発行

編集兼 下 中 邦 彦
発行者 東京都千代田区四番町4の1
発行所 株式会社 平凡社
郵便番号 102
東京都千代田区四番町4の1
振替東京 8-29639番
電話東京 (265) 0451 (代表)

© 株式会社 平凡社 1960 図書印刷 石津製本
Printed in Japan

定価はうち表紙に表示してあります
不良本は直接小社サービス課でお取替え致します
(送料小社負担)

忘れられた土地 序

人がその仲間たちから忘れられるということほど、おそろしいことはない。それは一種の抹殺である。近代人は孤独から出発したといわれるが、それは群れからはなれて、ひとり暮したということではなく、群れのなかにいるか、群れにつながりをもちつつ、孤独を発見したということである。仲間から忘れさられたのではなかった。そこで忘れられるということが、どのようなことであるか、また忘れられた世界で人はどのように生きてきたか、ということをつりかえって、おたがいの意識の上へのぼしてみたい。

昨日まで忘れられていたものが、今日ふたたび民衆の意識にのぼってくるのは多くの場合不幸なできごとを媒介にしていた。たとえば沖繩はひめゆりの塔とアメリカ軍占領によって、対馬は李承晩ラインと韓国との密貿易によって、山間の村はダム工事のため立退きとその補償金問題というような形で……。しかしそうして意識にのぼってきた場合、それはしばしば歪められていたり、忘れられた世界のほんの一部であつたりする。だから、その世界のほんとうの苦痛は、とりあげられることで、かえって忘れさられる。忘れられた世界が、そこで生きる人々の問題として全的に掘りおこされ、わたしたちの仲間として意識されることは少ない。

ここで忘れられるということがどんなことか一つの例をあげてみよう。

情島なまけは山口県大島の東端にある。情島といったのではこの島のものか、その付近に住む人達以外には印象の

中にないだろう。しかし映画『怒りの孤島』にでてくる愛島といえ、^{いし}「ああ、あの島か」と思い出す人もあるだろう。『怒りの孤島』には「瀬戸内海におこなわれていた事実だ」と前書があったから、今でも内海にはあんなにひどい児童虐待がおこなわれているのかと、映画をみた人たちは強い怒りと悲しみをひきおこしただろうが、映画と現実はかなり相違する。この島は怒りの孤島というよりも、むしろ忘れられた島なのだ。そのことをわたしたちは見なおし、考えなおしてみる必要がある。

情島は現在九十四世帯あり、そのうち八十二戸は漁業を主業としている。部落は、ゆるやかな傾斜地に畑の開かれた島の西北部および南部にはなく、山が海にせまっている東海岸の入江にかたまっている。つまりこの島は、そのはじめから、漁業を主業として成立したのである。島の人たちが猫の類ほどの土地をもとめて東岸に住みついたのは、その前面がまれにみる好漁場だったからだ。広島湾や上浦（倉橋島東部海面）へはいる魚の多くはこの海を通る。そこは潮流がたえず烈しく動いている諸島海峡であり、ここで島人たちは、一年中自分たちの生計をたてるほどの魚を釣ることができたから、他浦にみられるような出稼漁は少なかった。

さてこうした瀬戸にのぞんで一本釣のおこなわれるところでは、まず船を潮上に漕ぎのぼしておいて、潮の流れにのって潮下へと釣っていき、また潮上へのぼっていく。潮につれて下っていくとき、船の方向を一定させておかぬと、釣糸が垂直に水中に垂れないので、そのために一人槽につかまって船のかじをとりながら、船の方向を一定させる必要があった。梶子^{かじこ}というのはそういう仕事をすることで、家々の子どもがその仕事にしたがっていたが、漁船がふえ、一軒で二そうもつようになり、働けるものはみな釣に出かけることになる。梶子が不足はじめた。そこで大正の終りごろ愛媛県の三津浜地方から貧しい家の子をやってくることにした。八十円、百円という金を子の親に前渡しして三年または五年働かせてかえすのである。この子どもたちを「伊予子」といった。手のない家はどこでもやとい、昭和十年代には六十人もいたことがある。取扱いは家の

子どもとたいして変わるところもなかった。

それが戦争がはげしくなつてから愛媛県からそんなにこなくなつた。どこの家でも手不足がはなはだしくなつたからである。いっぽう、そのころから船に動力をすえつけることがさかんになつたから、できるだけ動力にたよつて、梶子もあまり使わなくなりだしたが、じぶんの家に、子どもや若いものがない場合には遠方から雇つてきた。戦後は広島県の八本松や呉の養護施設の子を使用する家もできた。多くは戦災孤児であつた。そしてこれは愛媛県からきていた子どもたちとはかなり様子もちがい、戦後の混乱のなかにあつて性格が異常になつていたものも少なくなつた。

そういう子どもたちがきはじめて、驚きもし困惑したのは島の人々であつた。島の生活は単純で他人を疑わねばならぬようなことのない世界であり、家をあけはなしにして留守にしておいても、物一つとられるではなく、夜など戸じまりしてゐる家はほとんどなかつたが、こうした子をやとうようになってから村の中に盗難がおこり、ときには飯櫃が空になつてゐることもあつた。今までなら子どもを叱りとなせば、ふたたびくりかえされることはなかつたのだが、今度はそういうわけにはいかなかつた。すれた子ども、しかも性格のやや異常なところのある子を、裏も表もない單純な大人たちが取扱うのだから、まったくもてあましたのである。

とくにもてあましたのは、異常性格のうえに胃拡張で、いくらたべてもまだ足らぬという子どもだつた。どこの家にもいって、人がいなければ釜の中の飯をたべた。そういう子をやとつてゐる家では他家への迷惑も大きく、ほとほと困つてしまつた。かえすべき子の親もともない。叱つてもおどしてもどうにもならなかつた。つまり取扱いを知らない人々の世界へ異常性格児をおいたことが、一つの悲劇をうんだ。島人が手を焼いて折檻もしたが、結局食はずぎがもとで死んでいった。

その後また二人の子どもが逃げた。巡査につかまつてから、逃亡の理由に虐待をあげた。それから問題が大

きくなってきた。警察の取調べがあり、占領軍からも調査にやってきた。それまで島の人のはのんきだった。根が正直だから、何もかも話した。何もかもといっても、島民がどのような生活をしているかについて語ったのではなく、取調べするものの質問にだけ答えるのである。取調べる方は最初から一つの意識をもっている。ただ虐待の事実だけをききただそうとする。話している方は生活の中のひとこまのつもりで話している。そして世間の人はものわかりがよいと思ったから正直に話したのだが、受けとる方はそうではなかった。

しかし情島は、実際には『怒りの孤島』である前に、忘れられた島であった。瀬戸内にも忘れられた島は多いが、この島もその一つである。島は周防大島といちばん接近しているところは五百メートルもないであろう。それほど親島に近いにもかかわらず、渡船は郵便船が一日に一回しかない。それ以外のときにこの島へ渡ろうとすれば船をやとわねばならず、船をやとえば片道四百円である。渡船回数が少ないのは各戸が漁船をもっているからであるが、じつはそのため多くの無駄もしている。渡船が発達すれば、安い運賃で周防大島へも出られるだろうし、漁業以外の産業もおこるだろう。島内の道もはなはだわるい。一本の山道で、それも海辺の崖の上を通っているところが多いので、すこしあれる日には子どもを学校へやることができない。島の子たちは学校へ弁当を持っていかないと、昼になると家へ食べにかえる。家々で食べている食物が粗末だから持ってゆけないというのである。小学校は本浦というところにある。伊ノ浦から通う子どもは家と学校のあいだ約一・三キロほどの道を三つの坂をこえて往復する。学校では昼の休みを一時間半あけているが、それでも往復二・六キロの道は子どもの足では走ってせい一杯である。とにかく一日に二往復して、しかもその一回は走らねばならないほど悪条件の道が今日までそのままに捨ておかれたのである。島民はそれを訴えることを知らなかった。むしろそれをあたりまえだと思っていたのである。しかも皮肉なことに、情島は瀬戸内海国立公園の指定区域のなかにふくまれている。

昭和二十一年の台風のあったときには部落と部落をつなぐ道はさらに悪かった。また浦には防波堤もなく、百そう近い漁船のほとんどが叩きつぶされ、流失して、使用にたえるものがわずか三そう残った。そうした八百さがりを打開しようとしているとき、昭和二十三年の梶子事件がおこった。そしてそれはゆがめられた形で映画にもなり、世間に印象づけられた。島の人たちはその弁明をするまゝに無口にならざるをえなかった。

わたしたちの周囲にはこうした形で忘れられた世界がじつに多い。かつては海外への出口として船の往来も多かった九州の南の島々や、朝鮮海峡にうかぶ対馬、宍岐などは、江戸幕府の鎖国政策に忠実な協力をしたことによつて忘れさられた。伊豆沖に点々とうかぶ伊豆諸島のごときは、自分たちがそこに住んでさえまく窮屈であるのに、多くの流人をかかえ、そのうえ本土への渡航は制限され、ひさしく島内に封鎖されて生きてきた。こんどの戦争では、老人子どもは内地へ強制疎開させられる憂き目もみている。山の奥にも忘れられた世界があった。そこにはみずから忘れられようとつとめて分け入った敗残者も多かったが、山間に住む農民たちとは別個に、山を相手に生きるマタギ、木地屋、タタラ師などの仲間もいた。彼らは農民との交渉もうすかつただけにまったく世間から忘れられ、ときには蔑視され、恐れられて生きてきた。しかも山の民はきびしい自然とのたたかいからくる息苦しさ、はげしい怒りを爆発することもあったが、それを押え押えて安住できる世界を何とかしてつくりあげようとした。しかしその計画と努力は空しくやぶれ去ったものが多い。

人間が自然をその意志のもとにおくためには、じつに歳月を要した。とくに人の居住の希薄な地帯では、自然はまだ飼いならされていらない荒々しい力でわたしたちにせまった。生物もまたその恣意のままに生活していた。風雨、地震、噴火をはじめ虫や鳥獣の害は、わたしたちをしばしば徹底的にたたかと思われた。そこでは人間がいかに小さかったことか。この苛酷な自然と四つにくんで、黙々とたたかってきた最前線の人たち、それは多くは名の知れぬ最底辺の人々であった。

目次

忘れられた土地 序

第一章 島に生きる人々

禁じられた海

閉じこめられた対馬

村の共同作業

ある老人と海

みちの島

七島灘をこえて

とり残された島々

無医島の願い

さいはての島々

『南島探験』

蘇鉄地獄

黒糖地獄

島ちやびの沖縄

鉄の文化

間切の生活

薩摩の琉球入り

琉球処分以後

火の島の記録

青ガ島還住

島をみすてて

第二章 山にうずもれた世界

消えてゆく山民

一〇

第二の住民 墓標なき人々

一九

山の騒動

北山一揆 米良、椎葉の山奥で 石徹白騒動

三〇

山にはたらく人々

北上山地に生きる 伊那谷の窮民 獣とのたたかい

男鹿寒風山麓農民手記 不毛なる土地で

第三章 北辺の土地

蝦夷の土

三〇

津軽海峡をこえて 泥炭地とのたたかい 火山灰地

重粘土にいとむ

自然のわざわい

三〇

襲いかかる虫群 荒れ狂うクマ 燃える山野

土と人

三〇

開拓者 村上政吉伝 死の曠野 戦災疎開移民団

第一章 島に生きる人々

禁じられた海

山くどせーハラセー山をくどいて
田にしましうハラヤーハトノー

隠岐盆踊唄



閉じこめられた対馬

木場づくりの労苦

天氣のよい日ならば、北九州の
呼子よびこの港あたりの丘からはるか

西の海をながめると、水平線にひくく一の字のように
壱岐の島がよこたわっている。ここからは、まだ対馬
の姿をながめることはできない。

対馬は壱岐にわたって北方をのぞむと、やや高い姿
勢で玄界灘の青い波の上にうかんでいる。

ここはもう九州よりも朝鮮のほうが近い。朝鮮まで
の距離はわずかに五十キロメートル、対馬の北部の海
べから西北をのぞむならば、朝鮮の島山が水平線にす
がたをみせている。対馬が朝鮮に密接する感じは、つ
ぎにかかげる上県郡豊小学校のある小学生の綴方にも
なまなましくえがかれている。

「ぼくの住んでいる対馬の鰐浦から晴れた日にながめ
ると、手にとるように、朝鮮がみえます。左に朝鮮海

峽、右手の水平線のかたが九州にあたるそうです。

鰐浦には基地もあり、朝鮮のせんそうのときには、ときどき大砲の音がきこえたりしました」

対馬はむかしから大陸の文化がはいってくる関門であり、日本人のでゆく関門でもあった。そうした特殊な地理的条件から芽ばえた、生き生きとした民衆の冒険心と活動力が鎖国によってたちきられたとき、対馬の人々の鬱屈と労働の物語がはじまるのである。

対馬の地形もまた大陸と日本とのあいだの門にふさわしくできていた。それはまるで多くの肢をもつ虫のように、ふくざつなリアス式の海岸線にぎざまれている。それは港としてはもつとも適しているが、陸地は土地の起伏がはげしく、山はそれほど高くなくにもかかわらず急傾斜をなし、樹木もすくなく荒々しい姿をみせている。

谷間にも平地らしいものはとほしい。もし平地らしいものをもとめるならば南端の豆^つ酸と北端の佐^き護谷である。しかしそれすら猫の額にひとしいものであった。そのうえ島の大半は中世層の頁^{けつ}岩とその崩壊土からなっており、この岩質は浸蝕と風化にたいする抵抗がよわく、水もちもじゅうぶんでないので、海岸の低地のほかは水田として利用することがむずかしかった。多くは畑地とするほかなかったのであるが、それすらも急峻な地形がわざわざいして耕地にできるところはそうなかった。そこで対馬の農民は山畑をつくり、それでも足りないので木^こ場をつくったのである。

木場とは焼畑のことである。火を放って山林を焼きはらい、その灰をこやしとしてソバなどをつくるのだが、



もちろん一年かぎりの畑作である。ところがイノシシ、鶏、キジなどの害がはなはだしい。とくにイノシシのわざわいが大きいので、農民は畑や木場に柵をたててこれをふせぎ、夜も不寝番をおこたらなかった。夜もすがら声をからして喚呼し夜明けにおよぶのである。勤労は昼夜たえることなく、苦難は言語に絶したという。しかも適期に種をまき、適期にとりいれることができなかったから、作物のできはよくなかった。

こんな苦勞をして山おく深くわけいって木場をつくっても、なお食糧が不足したということは、島に居住可能をこえた人が住んでいたことを物語る。

対馬の潜商

ではどうして島にそんなに多くの人々が住まねばならなかったか。それは島が朝鮮への海外への渡航が鎖国令によって禁じられたのちも余所の土地からきて潜商せんしょう（密貿易）をいとなむものが多かったのである。

対馬にはじつにおびただしい他国ものがあった。

『口上覚書』によると、延宝八年（一六八〇）対馬にいた他国ものは八千八十四人、天和元年（一六八一）には七千九百七十六人をかぞえた。そのうち府中（いまの厳原）に住むもの六千二十人、郷村に住むもの千百二十九人、銀山に住むもの八百二十五人である。他国ものの郷国は上方かみがたがもつとも多く、それについては北九州が多かったようであるが、銀山の鉱夫たちは石見からきたものが大半であった。他国者の八割近くが厳原の町に住んでいたということは、彼らが農業以外のなりわいにしたがっていたことを物語っている。その多くはあきないを目的に渡島したものであった。

おびただしい他国ものが対馬へわたってくるようになったのは、嘉吉三年（一四四三）の嘉吉条約以後のことである。この条約によって日本と朝鮮の貿易の規定がつくられ、日本からの貿易船が進出するようになったが、

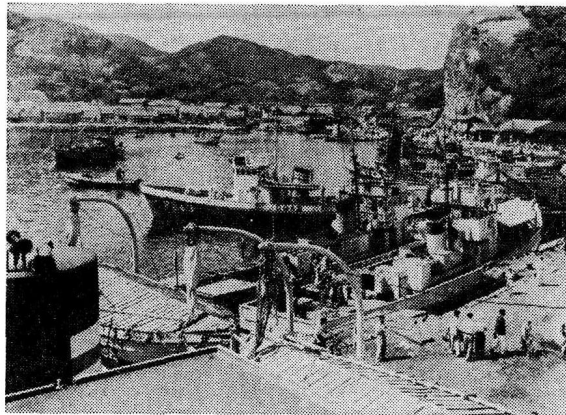
その貿易船は対馬の島主宗氏の許可証をたずさえていなければならなかった。そして宗氏は許可証交付料として吹拳銭をとり、貿易品にたいしては一俵物という米による税を課していた。

そのころの対馬も生産物がとぼしく、とくに、米をほとんど産出しない島であったから、けっして住みやすいところではなかった。こうした吹拳銭や一俵物は島の財政の大きなささえになっただけでなく、この島を経由していく貿易船や倭寇船などの手引をし、そのおこぼれをもらって生計をたてる島民もすくなくなかったようで、それは天正ごろ（一五七三—九二）の文書に「峯郡のうち木坂、志多賀村や、みのはやり候由ききおよび候間、たより候てまかりこし他所にや、みなど候よし聞きおよび候ハ、子孫においてその儀申付くべきの由八郡へ申しつかわし候」とあることによっても知られる。

文章がすこしわかりにくいのが、よそものと闇取引をしてはいけない、もしこれがわかったら子孫にいたるまで罰するということであろう。だが対馬は豊臣秀吉の文禄の役（一五九二—三）および慶長の役（一五九七—八）に朝鮮へ進出した軍の兵站基地になったから、いよいよ他国ものの数がふえる傾向をしめしていた。

潜 商 送 還

対馬藩の儒者で朝鮮方佐役をつとめていた雨森芳州が、密貿易について書いたおぼえ書きにも「利をこのむのは天下古今上下同前のことである。ことに対馬は食用不足の窮地、すえずえのものが潜商で生活をささえ



日本と朝鮮の交易の門敷原港は昔もいまも密貿易になやんでいる

ようにするのは自然の勢いであるから、これは対馬の病であるといってよい。どのようにいってみても、これを完全に禁止することはできないであろう」といつている。対馬はそのころ年々朝鮮から米を輸入し、それによって食糧の不足をおぎなっていたのである。

しかし密貿易をとりしまらなければ幕府の鎖国令にふれ、とりしまり不行届のゆえに領主宗氏の地位もあやうくなる。そこで対馬藩は密貿易の犯人はこれを死刑に処するという嚴罰主義でのぞんだが、これにたいし、「対馬人は食を朝鮮に仰いでおる。これでは身ここにありというも、義において彼の民とおなじじや」といつて、嚴罰に反対したのが鈍翁陶山存である。両者の意見の対立の結果はついに陶山^{すやまう}鈍翁^{どんおう}の主張がとおり、雨森芳州はその地位をひくことになった。

上方商人送還

温情を用いてなお密貿易をやめさせるにはどうしなければならぬか。これが芳州にかわつて、日朝交渉の衝にあたることになった鈍翁の課題であった。それは密貿易をただとりしまるのではなく、これを根絶する政策と体制をつくることであり、対馬の経済の根本的なたてなおしにひびく困難きわまらない問題であった。

鈍翁は密貿易をやめさせるためには、まず農民以外の他国ものを本土に送還し、あらたに入りこむものを制限しなければならぬと思った。鈍翁はみずから買つてでて旅人吟味役に就任し、客戸勘查（外来移住者の調査の制度をたてた。それは計画にあたつては断乎たる所信、実行にあたつては忍耐心とじつに長い年月を必要としたのであつて、さきにあげた天和元年から三十一年後の正徳二年には天和当時の四割たらずに他国ものの数がへっている。それでもなお三千百三十四人がおり、その居住の内わけは府中二千二百四十六人、郷村七百二十五人、銀山百六十三人であつた。

あたらしく入りこむものも元禄十三年（一七〇〇）には四百八十九人いたのが、あくる年には百七人にへり、